

〈原著論文〉

看護系大学の新入生が求めるソーシャル・サポートの特徴 －社会的スキルとの関連から－

Characteristics of the social support that the fresh students of the university of nursing expect ;
from the view of relation with the social skill

山本 純子¹, 近藤 純子²

要 旨

看護系大学の新入生が求めるソーシャル・サポートについて、サポート源（学内の友人・家族・教員）による特徴と、社会的スキルとの関連を明らかにすることを目的とした。1年生90名を対象に、「類似性評定に基づくサポート行動のクラスター構造」と「社会的スキル尺度」を用いて自記式質問紙調査を実施し、統計的に分析を行った。結果、新入生が求めるソーシャル・サポートとして、友人には家族に期待するサポート行動と同様の行動を求めている。また、教員へは【助言・相談】や【慰め・励まし】といったサポートを期待していたが、社会的スキルの『高度のスキル』や『ストレスを処理するスキル』が低い学生は、それらのスキルが高い学生に比べて期待していなかった。教員は新入生の、とりわけ社会的スキルの低い学生の特徴を理解して学習に必要な支援をする必要がある、との示唆を得た。

キーワード：看護学生，新入生，ソーシャル・サポート，社会的スキル
nursing students, fresh students, social support, social skill

1. 諸言

看護師は専門職であり、専門職者としての知識、技術、態度を養うことが求められる。専門職者を育成する看護基礎教育には、専門科目の履修は必須であり、それらの学習は1年次から4年次にかけて段階的に進められる。日本学生支援機構は、入学からおおよそ1年間は、個別の履修計画、流動的な友人関係、時間の自己管理など、急激に自発性が必要となる環境へと大きな変化を経験していること、不本意入学による挫折感、目的意識の喪失という課題を抱える学生もいることを指摘し、大学入学から卒業に至るサイクルにおいて、学年期のニーズに沿った教育的・成長促進的支援の必要性を述べている¹⁾。看護大学生においても環境の変化や新たな人間関係の構築など、一般大学生と同様な課題を抱えていると考えられる。このような課題を抱えたままの学生生活は、学習にも影響を及ぼすことが懸念されることから、新入生が大学の学習へスムーズに移行するた

めに、適切なサポートを行うことが重要になる。そのため、新入生の特徴を理解し、看護大学生への効果的なサポートの在り方を検討することが学生支援として重要となる。

学生へのサポートに関する研究では、ソーシャル・サポートの概念を用いているものがある。ソーシャル・サポートについてHouse²⁾は、①情緒的：共感したり、愛情を注いだり、信じてあげたりする、②道具的：仕事を手伝ったり、お金や物を貸してあげたりする、③情報的：問題への対処に必要な情報や知識を提供する、④評価的：人の行動や業績に最もふさわしい評価を与える、という4つの機能をあげ、それらのうち1つないしそれ以上の要素を含む相互作用をソーシャル・サポートとして定義した。心理学領域の多くの研究成果から、サポートと精神的・身体的健康との間には密接な関係があると明らかになっている³⁾。心理学領域では大学への環境移行時の適応に関しての研究^{4) 5)}や大学新入生を対象としたストレス及びソーシャル・サポートに関する研

1 Junko YAMAMOTO 千里金蘭大学 看護学部

2 Junko KONDO 千里金蘭大学 看護学部

受理日：2015年10月15日

査読付

究^{6)~8)}がなされている。看護学領域においては、臨地実習における報告^{9)~11)}が多く、入学早期の支援と関連づけた研究は認められない。

また、大学生活を送る上での影響要因として、対人関係能力が挙げられる。菊池¹²⁾は、対人関係を円滑に運ぶために役立つスキル(技能)を社会的スキルと定義しているが、社会的スキルはサポートを他者に求める際の行動に影響を与えることから、新入生がどのような社会的スキルを身につけているのかを把握することは、支援を検討する上で重要であると考えた。

そこで、本研究では看護系大学に入学した看護学生が必要とするソーシャル・サポートについて取り上げ、新入生の社会的スキルとの関連を分析し、実態を把握することを目的とする。

Ⅱ. 研究目的

本研究は、以下の内容を明らかにすることを目的とする。

1. 新入生が求めるサポートについて、サポート源(学内の友人、家族、教員)による特徴を明らかにする
2. 新入生の社会的スキルと教員へ求めるサポートの関連を明らかにする

Ⅲ. 研究方法

1. 研究対象者

看護系大学に入学した大学1年生90名

2. 調査時期

2013年7月

3. 調査方法

無記名自記式質問紙を用いて実施した。前期の必修科目の講義後に調査協力を依頼、回収箱にて回収した。

4. 調査内容

ソーシャル・サポート(以下、サポート)の測定には、福岡¹³⁾の「類似性評定に基づくサポート行動のクラスター構造」の分類を用いる。この指標は21項目で構成され、①助言・相談、②慰め・励まし、③物質的・金銭的援助、④行動的援助の4側面から

評価できる。本研究においては、サポートの受け手である新入生を主体とした、周囲から得られると予想されるサポートについて取り上げ、周囲のサポート的役割(機能)について調査することを目的としている。そのため、サポートの測定には期待されるサポートを測定でき、サポートが機能的に分類されていることが必要である。本指標は、期待されるサポートをサポート源別に、Houseの機能的サポートの分類に準じて測定できることから、本研究にて採用した。サポート源を学内の友人(以下友人)、家族、教員とし、それら3者へ期待するサポート内容について回答を求めた。この指標は、「4:きっとそうだ」「3:たぶんそうだ」「2:たぶん違う」「1:ぜったい違う」の4段階で評価できる。

社会的スキル(以下、スキル)の測定には、菊池¹²⁾の「社会的スキル尺度(KiSS-18)」を用いる。この尺度は、若者のための社会的スキルを測定するもので、18項目により構成されている。それら18項目は、①初歩的なスキル、②高度のスキル、③感情処理のスキル、④攻撃に代わるスキル、⑤ストレスを処理するスキル、⑥計画のスキルの6つのスキルに分類されている。この尺度は、「5:いつもそうだ」「4:たいていそうだ」「3:どちらともいえない」「2:たいていそうでない」「1:いつもそうでない」の5段階評価で、 α 係数=0.83と高い信頼性を有し、妥当性に関してもきわめて高い尺度である¹⁴⁾。

5. 分析方法

初めに、友人、家族、教員に期待するサポート内容の違いをみるため、サポート源毎に因子分析(最尤法、プロマックス回転)を行い、下位尺度の内的整合性をCronbachの α 係数で評価した。その後、サポートとスキルの関連をみるため、各尺度の記述統計、Pearsonの相関係数、相関を認めた内容についてはスキルの得点を平均値で2群に分類し、t検定を行った。分析を行うにあたり、欠損値にはその項目の平均値を代入した。統計処理にはSPSSver.19を使用した。

6. 倫理的配慮

対象者には、研究の目的や方法、参加は自由意思であり成績とは無関係であること、質問紙の回収をもって研究協力の承諾とすること、質問紙は無記名であり、調査結果は統計的に処理されるため個人が特定されないこと、目的以外には使用しないことに

ついて、書面および口頭で説明した。なお本研究は、研究者が所属する大学の研究倫理審査委員会の承認を得て行った。

IV. 結果

新入生90名のうち85名より回答があり（回収率94.4%）、85名を分析対象とした（有効回答率100%）。学生の平均年齢は18.4歳だった。

1. 新入生が友人、家族、教員へ求めるサポートの特徴

友人・家族・教員に求めるサポートについて因子分析を行い、複数の因子に高い負荷量を示す項目を順次削除した結果、友人は19項目による3因子（表1）、家族は18項目による3因子（表2）、教員は19項目による4因子（表3）が抽出された。福岡の分類は4因子で構成されていたが、友人と家族の結果では、【助言・相談】【慰め・励まし】の2因子が1因子で構成されていたため、その因子を【受容・助言】

表1 新入生が友人に求めるソーシャル・サポート 因子分析結果

因子名と項目		因子負荷量		
		1	2	3
第1因子：受容・助言 Cronbach's $\alpha = .93$				
1	わたしが自分個人の力では解決できないような難しい問題にぶつかったとき、誰（どこ）に援助を求めたらいいか教える。	.619	.002	.007
2	わたしの考え方ややり方が間違っているとき、そのことを率直に伝える。	.499	.025	.115
3	わたしが勉強や仕事のことで問題をかかえているとき、それについてアドバイスする。	.732	-.094	.115
4	わたしが学校や職場、地域、家庭などでの人間関係について悩んでいるとき、それについて相談にのる。	.780	.164	-.195
5	わたしに日常生活の中ですすめ方ややり方のわからないことがあるとき、それを具体的に教える。	.638	.042	-.057
6	わたしが自分にとって重要なこと（たとえば進学や就・転職など）を決めなくてはならないとき、それについてアドバイスする。	.715	-.069	.013
7	わたしが落ち込んでいるとき、元気づける。	.857	.060	-.080
8	わたしが個人的な悩みに心配事がかかえているとき、その話を聞く。	.922	-.067	-.012
9	わたしがやっかいな問題に頭を悩ませているとき、冗談を言ったり一緒に何かやったりして、私の気をまぎれさせる。	.775	-.008	-.002
10	わたしが精神的なショックで動揺しているとき、なぐさめる。	.866	-.019	.028
11	わたしが気が動転するようなことを経験したとき、同情を示す。	.572	-.037	.252
第2因子：物質的・金銭的援助 Cronbach's $\alpha = .72$				
13	わたしにかなり大がかりなものや高価なもの（パソコン、礼服など）を貸す。	.091	.022	.548
14	わたしが緊急にかなり多額のお金を必要とするようになったとき（家賃や学費の支払い、事故の弁償など）、その分のお金を出す。	-.251	.021	.675
15	わたしが財布をなくしたり物をこわした弁償などで急に数千円必要になったとき、その分のお金を貸す。	.156	-.042	.648
16	わたしが忙しくしているとき、ちょっとした用事（家事や簡単な仕事など）の手助けをする。	.174	.163	.521
第3因子：行動的援助 Cronbach's $\alpha = .84$				
17	わたしが急病で倒れたとき、病院まで連れていく。	.195	.652	-.142
18	わたしが家をしばらく留守にすると、ペットや植物などわたしの家の世話をする。	-.180	.741	.093
19	わたしが病気で数日間寝ていなくてはならないとき、看病や世話をする。	-.036	.796	.139
20	わたしに引っ越しなど大がかりな用事があるとき、その手伝いをする。	.059	.772	-.011
回転後の負荷量平方和		6.806	4.017	2.918
因子相関行列 第1因子		1.000	.428	.288
第2因子			1.000	.518
第3因子				1.000

因子抽出法：最尤法 回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

表2 新入生が家族に求めるソーシャル・サポート 因子分析結果

因子名と項目		因子負荷量		
		1	2	3
第1因子: 受容・助言 Cronbach's $\alpha = .95$				
1	わたしが自分個人の力では解決できないような難しい問題にぶつかったとき、誰(どこ)に援助を求めたらいいか教える。	.726	-.026	.030
2	わたしの考え方ややり方が間違っているとき、そのことを率直に伝える。	.698	-.065	.078
3	わたしが勉強や仕事のことで問題をかかえているとき、それについてアドバイスする。	.703	-.053	.057
4	わたしが学校や職場、地域、家庭などでの人間関係について悩んでいるとき、それについて相談にのる。	.731	.060	.089
6	わたしが自分にとって重要なこと(たとえば進学や就・転職など)を決めなくてはならないとき、それについてアドバイスする。	.726	.071	.033
7	わたしが落ち込んでいるとき、元気づける。	.836	.046	.016
8	わたしが個人的な悩みに心配をかかえているとき、その話を聞く。	.921	.042	-.067
9	わたしがやっかいな問題に頭を悩ませているとき、冗談を言ったり一緒に何かやったりして、私の気をまぎれさせる。	.880	.083	-.066
10	わたしが精神的なショックで動揺しているとき、なぐさめる。	.982	-.084	-.047
11	わたしが気が動転するようなことを経験したとき、同情を示す。	.914	-.075	-.071
第2因子: 物質的・金銭的援助 Cronbach's $\alpha = .84$				
13	わたしにかなり大がかりなものや高価なもの(パソコン、礼服など)を貸す。	.221	-.016	.564
14	わたしが緊急にかなり多額のお金を必要とするようになったとき(家賃や学費の支払い、事故の弁償など)、その分のお金を出す。	-.092	.080	.867
15	わたしが財布をなくしたり物をこわした弁償などで急に数千円必要になったとき、その分のお金を貸す。	-.031	.044	.952
第3因子: 行動的援助 Cronbach's $\alpha = .91$				
16	わたしが忙しくしているとき、ちょっとした用事(家事や簡単な仕事など)の手助けをする。	.273	.507	.142
17	わたしが急病で倒れたとき、病院まで連れていく。	-.194	.893	.037
19	わたしが病気で数日間寝ていなくてはならないとき、看病や世話をする。	.028	.886	-.019
20	わたしに引っ越しなど大がかりな用事があるとき、その手伝いをする。	.125	.648	.090
21	わたしに何か事情があれば、しばらくの間泊まる場所を提供する。	-.023	1.025	-.076
回転後の負荷量平方和		8.026	6.228	4.686
因子相関行列 第1因子		1.000	.487	.341
第2因子			1.000	.681
第3因子				1.000

因子抽出法: 最尤法 回転法: Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

看護系大学の新入生が求めるソーシャル・サポートの特徴

表3 新入生が教員に求めるソーシャル・サポート 因子分析結果

因子名と項目		因子負荷量			
		1	2	3	4
第1因子: 助言・相談 Cronbach's α = .88					
1	わたしが自分個人の力では解決できないような難しい問題にぶつかったとき、誰(どこ)に援助を求めたらいいか教える。	-.040	.219	.521	.083
2	わたしの考え方ややり方が間違っているとき、そのことを率直に伝える。	.163	-.066	.743	-.118
3	わたしが勉強や仕事のことで問題をかかえているとき、それについてアドバイスする。	.070	-.209	.985	-.056
4	わたしが学校や職場、地域、家庭などでの人間関係について悩んでいるとき、それについて相談にのる。	-.014	.164	.695	.054
5	わたしに日常生活の中ですすめ方ややり方のわからないことがあるとき、それを具体的に教える。	-.144	.181	.608	.122
6	わたしが自分にとって重要なこと(たとえば進学や就・転職など)を決めなくてはならないとき、それについてアドバイスする。	-.085	.005	.761	-.076
第2因子: 慰め・励まし Cronbach's α = .94					
7	わたしが落ち込んでいるとき、元気づける。	-.124	.953	-.077	.057
8	わたしが個人的な悩みで心配事をかかえているとき、その話を聞く。	-.091	.770	.169	.048
9	わたしがやっかいな問題に頭を悩ませているとき、冗談を言ったり一緒に何かをやったりして、私の気をまぎれさせる。	.203	.894	-.087	-.086
10	わたしが精神的なショックで動揺しているとき、なぐさめる。	.034	.883	.063	-.035
11	わたしが気が動転するようなことを経験したとき、同情を示す。	.117	.769	.051	-.042
第3因子: 物質的・金銭的援助 Cronbach's α = .90					
13	わたしにかなり大がかりなものや高価なもの(パソコン、礼服など)を貸す。	.315	.081	-.005	.526
14	わたしが緊急にかなり多額のお金を必要とするようになったとき(家賃や学費の支払い、事故の弁償など)、その分のお金を出す。	.082	-.115	-.003	.980
15	わたしが財布をなくしたり物をこわした弁償などで急に数千円必要になったとき、その分のお金を貸す。	.016	.070	-.056	.841
第4因子: 行動的援助 Cronbach's α = .95					
16	わたしが忙ししているとき、ちょっとした用事(家事や簡単な仕事など)の手助けをする。	.637	-.076	-.008	.334
18	わたしが家をしばらく留守にすると、ペットや植物などわたしの家の世話をする。	.938	-.043	.014	.039
19	わたしが病気で数日間寝ていなくてはならないとき、看病や世話をする。	.976	.087	-.009	-.135
20	わたしに引っ越しなど大がかりな用事があるとき、その手伝いをする。	.982	.022	-.086	-.078
21	わたしに何か事情があれば、しばらくの間泊まる場所を提供する。	.691	.038	.161	.186
回転後の負荷量平方和		5.973	5.953	4.473	4.581
因子相関行列	第1因子	1.000	.416	-.082	.620
	第2因子		1.000	.505	.328
	第3因子			1.000	.025
	第4因子				1.000

因子抽出法: 最尤法 回転法: Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

と命名した。各因子のCronbachの α 係数は、友人0.93~0.72、家族0.95~0.84、教員0.95~0.88であった。教員へ求めるサポートの因子別平均値は高い順に、【助言・相談】2.98 (SD0.57)、【慰め・励まし】2.44 (SD0.66)、【物質的・金銭的援助】1.72 (SD0.73)、【行動的援助】1.65 (SD0.71) だった (表4)。

2. 新入生の社会的スキルと教員へ求めるサポートの関連

新入生のスキルの合計得点の平均値は60.61 (SD9.74) で、因子別平均値は高い順に『高度のスキル』3.47 (SD0.62)、『ストレスを処理するスキル』3.42 (SD0.62)、『初歩的なスキル』3.38 (SD0.85)、『計画のスキル』3.34 (SD0.72)、『攻撃に代わるスキル』3.33 (SD0.59)、『感情処理のスキル』3.26 (SD0.67) であった (表5)。

サポートとスキルの相関では、【助言・相談】と『高度のスキル』($r=0.361$, $p<0.01$) および『ストレスを処理するスキル』($r=0.262$, $p<0.05$) に正の有意な関連がみられた (表6)。さらに、t検定にて『高度のスキル』低得点群と高得点群の間でサポート【助言・相談】の平均値と比較した結果、低得点群が高得点群より有意に低かった ($p<0.01$) (図1)。また、『ストレスを処理するスキル』においても、低得点群が高得点群より有意に低かった ($p<0.01$) (図2)。

表4 教員へ求めるソーシャル・サポート 因子別平均値

因子	平均値	SD
助言・相談	2.98	.57
慰め・励まし	2.44	.66
物質的・金銭的援助	1.72	.73
行動的援助	1.65	.71

表5 新入生の社会的スキル 因子別平均値

因子	平均値	SD
合計得点	60.61	9.74
初歩的なスキル	3.38	.85
高度のスキル	3.47	.62
感情処理のスキル	3.26	.67
攻撃に代わるスキル	3.33	.59
ストレスを処理するスキル	3.42	.62
計画のスキル	3.34	.72

表6 ソーシャル・サポートと社会的スキルの相関関係

	社会的スキル					
	初歩的なスキル	高度のスキル	感情処理のスキル	攻撃に代わるスキル	ストレスを処理するスキル	計画のスキル
助言・相談	.098	.361 **	.057	.193	.262 *	.036
・ソ サ 慰め・励まし ポシ ーヤ 物質的・金銭的援助 トル	.088	.090	.090	.108	.161	-.068
	.160	.010	.108	.122	-.046	-.013
	.102	.061	.074	.060	-.043	.017

* $p<0.05$, ** $p<0.01$

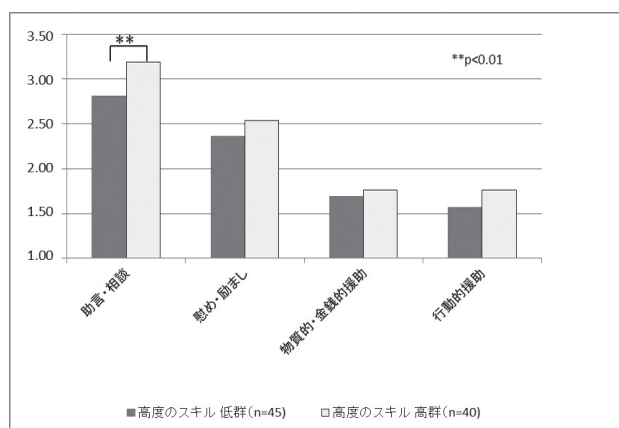


図1 ソーシャル・サポート別「高度のスキル」高・低群間のt検定

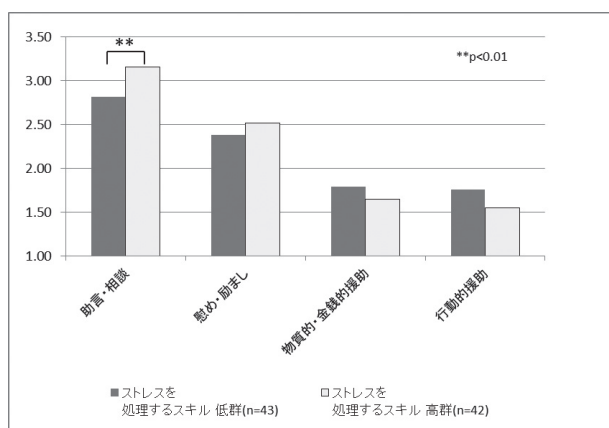


図2 ソーシャル・サポート別「ストレスを処理するスキル」高・低群間のt検定

考察

1. 新入生が友人、家族、教員へ求めるサポートの特徴

新入生が友人、家族、教員へ求めるサポート内容について因子分析を実施した結果、教員へ期待するサポートの内容の結果は、一般大学生を対象とした先行研究¹³⁾とほぼ一致していた。しかし、友人や家族へ期待する結果は、教員へ期待するサポート内容の構造とは異なり、福岡の分類の【助言・相談】【慰め・励まし】が統合された3因子で構成され、友人と家族へ期待するサポート内容の構造は近い構造を示していた。そのため、本学の新入生は友人に対しても家族に期待するサポート行動と同様の行動を求めていると考えられる。サポート授受の視点から捉えると、家族は安定した結びつきがある関係である¹⁵⁾。よって、新入生同士においても親交を深め、結びつきがもてる機会が入学当初においては重要になる。一方、教員との関係は家族に求める関係とは異なっており、【助言・相談】についてのサポートを多く期待している結果からも、教員は役割に関連した結びつきの関係として捉えていると推察できる。そのため、大学入学当初のオリエンテーションなどで、“教員の役割を情報提供する”などを行い、大学生活への適応のサポートが必要になった際に、新入生が教員の役割を知って学生自身が具体的な行動をとることができるような支援が必要である。

2. 新入生の社会的スキルと教員へ求めるサポートの関連

新入生のスキルの合計得点の平均値(60.61)は、女子大学生の平均値¹²⁾(58.35)と比べて高かった。また、看護学生1年生を対象とした結果では、竹田¹⁶⁾(56.53)より高かったが、工藤¹⁷⁾(62.20)より低かったことから、本学の新入生の社会的スキルは、平均的であることが明らかになった。しかし、因子別平均値では、先行研究結果^{16) 17)}と順位が異なっていた。このことから、集団によって持っている社会的スキルの特徴が異なるため、その集団にあった関わりを考えるためには、本研究のような調査を行い、特徴を把握したうえで関わる必要がある。

本学の結果では、『高度のスキル』が高く、『感情処理のスキル』が低かった。『高度のスキル』は、人に助けを求めたり、指示を与えたり、謝ったりするなどに関わるスキルで、問題に直面した時に他者

に働きかけたり、解決に向けた行動がとれるスキルを有する学生が多い傾向があると解釈できる。一方、低かった『感情処理のスキル』は、自分の感情に気づき、その感情を表現したり、おそれを処理するなどに関わるスキルである。そのため、全体の特徴として、自分の感情を表出できず、不安を抱えたまま大学生活を送っている学生が多い傾向がある、と解釈できる。よって、新入生が大学生活において困っていることや不安に感じていることを表出できるような機会を設けるなどの取り組みが求められる。

新入生は教員に対して【助言・相談】や【慰め・励まし】といったサポートを期待していた。しかし、教員へ助言・相談のサポートを多く求めている全体の傾向にも関わらず、『高度のスキル』や『ストレスを処理するスキル』が低い学生は、それらのスキルの高い学生に比べて【助言・相談】を期待していない。期待をしていない背景には、各スキルの低さから、援助を求めようとしても、援助して欲しい内容を上手く表現できなかったり、その時のストレスに自分が左右されて援助を求める余裕がないこと等が考えられる。スキルの低い学生ほど、サポートを得る手段を持ち合わせておらず、結果、教員へもサポートを求める行動をしない可能性がある。よって、教員は新入生の、とりわけ社会的スキルの低い学生の特徴を理解して、学習に必要な支援をする必要がある。

VI. 結論

- 1) 新入生が友人、家族、教員に求めるサポートでは、友人と家族は3因子、教員は4因子が抽出され、友人には家族に期待するサポート行動と同様の行動を求めている。
- 2) 教員へは【助言・相談】や【慰め・励まし】といったサポートを期待し、社会的スキルが低い学生は、それらのスキルが高い学生に比べて期待していなかった。
- 3) 教員は、とりわけ社会的スキルの低い学生の特徴を理解して学習に必要な支援をする必要がある。

VII. 研究の限界と今後の課題

本研究は、1施設における調査であるため、結果を一般化することには限界がある。また、新入生に

対しての1回のみの調査であるため、調査で得られた結果を、対象学年に一般化することにも限界がある。看護学生は学年が上がるにつれて、看護の専門的知識の習得や、病院や施設等での臨地実習など、学ぶ内容も学ぶ場所も多様なものとなる。そのなかで教員に求めるサポートは、新入生のころとは変わっている可能性がある。よって、経年的な調査が必要と考える。

謝辞

本研究の実施にあたり、ご協力くださいました看護学生の皆様に深く感謝申し上げます。

なお、本研究の結果の一部は、第34回日本看護科学学会学術集会にて発表を行った。

引用文献

- 1) 日本学生支援機構, 大学における学生相談体制の充実方策について－「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協同」－ (2007)
- 2) House JS, Work stress and social support. Reading: Addison Wesley. (1981)
- 3) Cohen S, Social Relationships and Health. Special Issue: Awards Issue2004, 59 (8), 676-684 (2004)
- 4) 広沢俊宗, 大学新入生の適応に関する研究 (I)－学習面での適応－不適応に関わる諸変数の検討－, 関西国際大学研究紀要, 8, 121-138 (2007)
- 5) 山田ゆかり, 大学新入生における適応感の検討, 名古屋文理大学紀要, 6, 29-36 (2006)
- 6) 兒玉幸子, 佐藤武, 新地浩一, 大学新入生のメンタルヘルスとその関連要因, CUMBUS HEALTH, 47 (2), 187-192 (2010)
- 7) 山下匡将, 亀山育海, 小関久恵他, 新入生における自覚的健康感とライフスタイルに関する研究, 北海道公衆衛生学雑誌, 19, 55-64 (2006)
- 8) 志渡晃一, 沼田知穂, 川越利恵他, 本学新入生におけるライフスタイルと健康に関する研究, 北海道医療大学看護福祉学部紀要, 8, 9-13 (2001)
- 9) 我妻幸子, 臨地実習における臨床実習指導者のソーシャルサポートと看護学生の自己教育力の関連についての検討, 神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録, 28, 73-78 (2003)
- 10) 毛利貴子, 眞鍋えみ子, 脇田満里子, 看護学生

における臨地実習状況下でのストレスコーピングと関連する心理的要因の検討, 京都府立医科大学看護学科紀要, 19, 7-12 (2010)

- 11) 竹下美恵子, 看護学生の臨地実習におけるソーシャル・サポートとしての教員の支援の検討, 日本看護学教育学会誌, 15 (3), 23-33 (2006)
- 12) 菊池章夫, 思いやりを科学する, 川島書店 (1988)
- 13) 福岡欣治, ソーシャル・サポート内容およびサポート源の分類について, 日本心理学会第64回大会発表論文集, 144 (2000)
- 14) 堀洋道監修, 心理学測定尺度Ⅱ－人間と社会のつながりを捉える＜対人関係・価値観＞－, 170-173, サイエンス社 (2002)
- 15) Kahn, R.L.&Antnucci, T.C., Convoys over the life course: Attachment, roles, and social support. In P.B.Baltes & O.G.Brim(Eds.), Life-span development and behavior. New York: Academic Press, 253-286 (1980). 遠藤利彦・河合千恵子 (訳) 生涯にわたる「コンボイ」－愛着・役割・社会的支え－東洋・柏木恵子・高橋恵子 (編集・監訳) 生涯発達の心理学2巻 気質・自己・パーソナリティ, 33-70, 新曜社 (1993)
- 16) 竹田かおり, 鉢呂美幸, 工藤恭子, 看護大学生の社会的スキルに関連する生活および実習体験, 名寄市立大学道北地域研究所年報, 30, 21-27 (2012)
- 17) 工藤千賀子, 原田真里子, 櫛引美代子, G大学看護学部における社会的スキルの実態, 北日本看護学会誌, 10 (1), 45-51 (2007)